

ESSAY
エッセイ

クラシックは面白い — その 13

ピアノのお話 VI

モーツァルトは 25 歳までザルツブルクで暮らしますが、途中で一度領主の大司教に楯突いてクビになり、就職先を求めて旅行に出たことがあります。途中でアウクスブルクという町に寄りました。ここは父レオポルトの生地ですが、シュタインというピアノ作りの職人がいて、そのピアノの評判を聞いて見学に行ったわけです。その結果を父親に報告した手紙が残っています。

「きょうはシュタインのピアノの話から始めます。彼の製品を見るまでは、シュペート (Späth) のピアノがここまで私の好みでした。しかし今はシュタインのほうが良くなりました。それはレーゲンスブルク製の楽器 (シュペートのこと) よりも音の消し方がずっと優れているからです。。」

現在のグランド・ピアノでは弦の上にダンパーと呼ばれるフェルト製の装置があって、鍵を押している間はそれが弦から上に離れており、鍵から指が離れるとそれが弦の上に降りて音を止めるようになっています。また右足のペダルを踏むと、88 鍵全部のダンパーが上がったままになり、指を鍵から離しても音が鳴り続けます。

「(シュタインのピアノでは) 私が鍵を強く打って鍵の上に置いたままにもできますが、指を離すと、音は生まれた瞬間に止まってしまいます。またどんな弾き方をしても音は均等に出来ます。不快な音は出ないし、音が出すぎたり、弱すぎたり、出なかったりすることはありません。つまりすべて均等に音が出るということです」

いまのピアノを知っている方は、上記のような現象は当たり前だと思われるでしょうが、この時代には、ピアノのメカニズムが発展段階にあり、メーカーごとに別の工夫がなされていたため“音が均等に出る”ことすら難しかったことがわかります。

「(シュタインが) この手のピアノを 300 グルデン以下では売らないというのは本当です」

300 グルデンというとモーツァルトの年俸の 2 倍に当たります。平均的サラリーマンの現代の給料を一年 500 万円としますと、この値段は 1000 万円ということになります。相当に高価なものだったことがわかります。

「それでも、シュタインがこれを作るのに要した手間と工程の難しさを考えると、その値段でもペイしないでしょう」
すべての部品、蓋やボディ、響板、脚のような大きなものから、中に組みこまれる小さな部品やピンまで、全部が手作りの時代でありました。(つづく)

執筆／石井宏 (音楽評論家)

1930 年、東京生まれ。音楽評論家・作家・翻訳家。モーツァルト評論の第一人者と目され、評論活動のほか、ラジオやテレビの番組でも評判となる。2004 年、『反音楽史 さらば、ベートーヴェン』(新潮社) で山本七平賞を受賞。

美味しく！楽しく！聴きごたえたっぷりのピアノ・フェスティバルがまた岐阜へやって来る！

ジャコバン国際ピアノ音楽祭 2018 in 岐阜

チケット
発売中

2018. 6/9 土

オープニング・
コンサート

全席指定 500円

16:00開演 [15:15開場]

出演／細川千尋トリオ



© 楽苑重人

トークイベント

自由席 500円

18:00開演 [17:45開場] ※リハーサル室

スペシャル・ピアノ講座「調律師が見た巨匠たち」

講師／瀬川 宏 聞き手／浦久俊彦

2018. 6/10 日

マチネ・
コンサートI&II

全席指定 1,500円

14:00開演 [13:30ホール開場]

出演／小川加恵、レミ・パノシアン



© Masaaki Hiraga

ソワレ・コンサート

全席指定 1,500円

18:30開演 [18:00ホール開場]

出演／福岡光太郎



パワフル生産量 日本一
岐阜県大野町産
バラ苗鉢
プレゼント!
「マチネの部」経営
抽選 100 名様